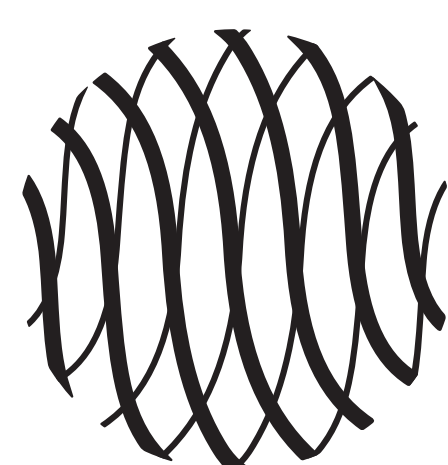


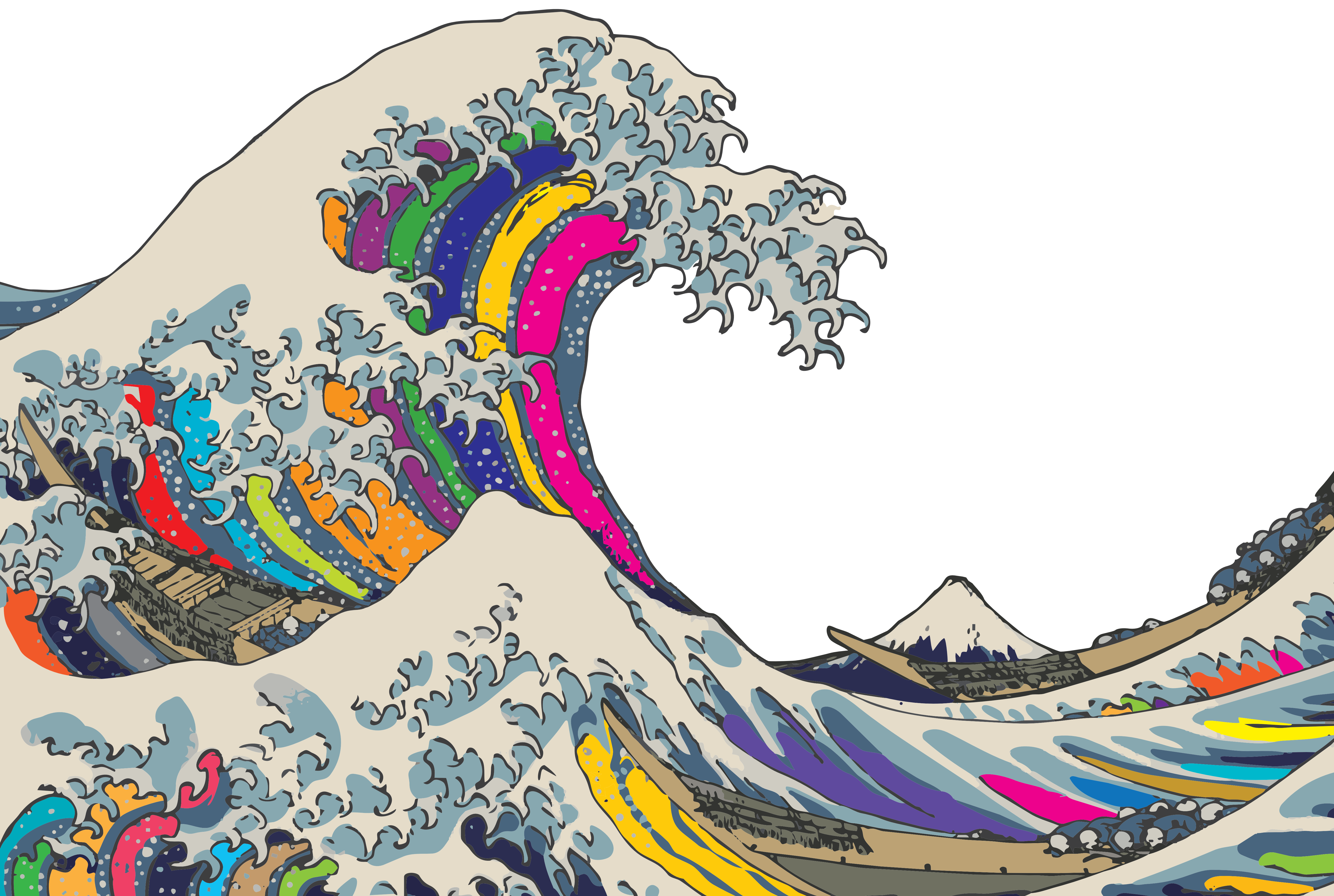
JAPAN COLORS CHRONICLE

古代から現代まで。時代を染めてきた、日本人の色彩文化。



hoyu
hair color museum
ホーユーヘアカラーミュージアム

開催期間：2026 4.11 SAT ▶ 8.30 SUN 入館料 無 料 開館時間 10:00 ~ 17:00
(入館は16:30まで)
ホーユーヘアカラーミュージアム 愛知県名古屋市東区徳川町903 (徳川美術館南隣)



JAPAN COLORS CHRONICLE

古代から現代まで。時代を染めてきた、日本人の色彩文化。

古代から現代まで。日本人は、色とともに生きてきました。

太陽の明暗から生まれた色。

自然を映し、身分を語り、制限の中で磨かれ、世界と出会い、姿を変えてきた色。

そのどれもが、ただ美しいだけではなく、生き方や価値観を映すものでした。

色は、時代が変わるたびに問いかけます。

何を美しいと感じるのか。どうありたいのか。どんな自分を、世界に見せたいのか。

答えは、ひとつではありません。

だからこそ、色は失われず、今も更新され続けています。

今日、あなたが選ぶその色も、この長い色の物語の中に、確かに連なっています。

色は、過去ではありません。

色は、いまも、あなたとともにある。

序章 目に映る色の正体は？

自然が豊かな日本では、四季の移ろいの中に無数の色を見つけ、日本人独自の色彩文化を育んできました。

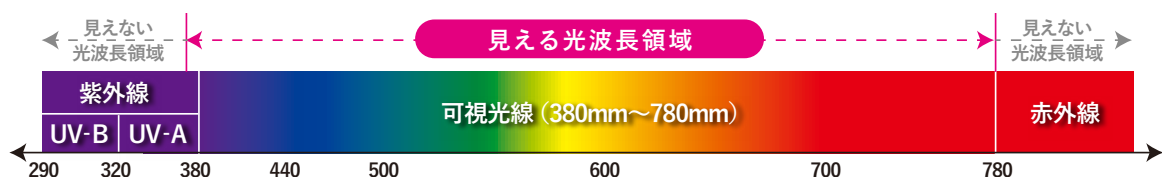
そもそも色とはなんなのでしょうか？また、なぜその色に見えるのでしょうか？

色を決めているのは「光」

光は実は様々な色でできています。赤いリンゴは光のなかの、主に赤い光を、バナナは主に黄色い光を反射するので、それぞれ赤色、黄色に見えるのです。白い物体は全ての光の色を反射することで白く見え、光の反射のバランスでアイボリーやオフホワイトなどに見えます。また、黒は全ての光を吸収することで黒く見え、光の吸収のバランスで茶色っぽい黒や緑がかった黒などに見えます。



可視光線とは、人間の目が色として認識できる電磁波の範囲で、波長は約380～780ナノメートルです。波長の短い順に紫、青、緑、黄、橙、赤の順に並び、プリズムを通すと虹の七色に見えます。この範囲より波長が短いものが紫外線、長いものが赤外線です。



食品、化粧品、染料、顔料に使われる「色素」とは、色そのものではなく、光を操り、その色に“見せる”ための物質なのです。

序章 色は、素材と結びつく

季節を身にまとうために布を染める。若さや個性を演出するために髪を染める。

人は様々なものに着色することで、色を生活に取り入れ、そのイメージを活かし楽しむことができました。
では、「染める」「染まる」とは、どういうことなのでしょう？

「染める」「染まる」のキホン

- ① 「染まる」とは色が素材に定着すること
- ② 「染める」ための染料は、色素があり、素材に定着させるための吸着力をもっている
- ③ 染料と素材が化学か天然かでも仕上がりが大きく異なり染料と素材の組み合わせによって染まる・染まらない・良く（濃く）染まる・染まり難いなどの差が出る場合がある。
両者を仲立ちする物質（媒染剤^{ばいせんざい}）を使うことで染色が可能になる場合もある。

○ 化学染料 × 化学素材

○ 化学染料 × (媒染剤) × 天然素材

○ 天然染料 × 天然素材
(植物染など) 植物性-麻・綿
動物性-絹(蚕^{かいこ})・毛

△ 天然染料 × (媒染剤) × 化学素材

- ④ 染料と顔料の大きな違い

染料 ▶ 液体に溶けて対象物に浸透する

顔料 ▶ 液体に溶けず表面に付着する

天然染めにまつわるエトセトラ

- ① 化学染料が日本に入ってきたのは江戸末期のこと。それまでは植物を中心とした天然の染料で染めていました。
- ② 媒染剤の種類やpH(酸性・アルカリ性)でも仕上がりの色が異なります。
化学染料が入ってくるまでの日本では銅、錆びた鉄、灰汁、酢など天然の媒染剤が用いられていました。

第1章 はじまりの色、日本の色（古代～古墳時代）

色のはじまりは、太陽から

- 日本における初めての色の認識は太陽に由来するとされています。
そしてたった4つの色で識別されていました。

1) 明（めい）－ アカ

太陽が明るくなること、赤の語源。漢字の赤は「大きく燃え上がる様」を表す。生命の象徴。

2) 暗（あん）－ クロ

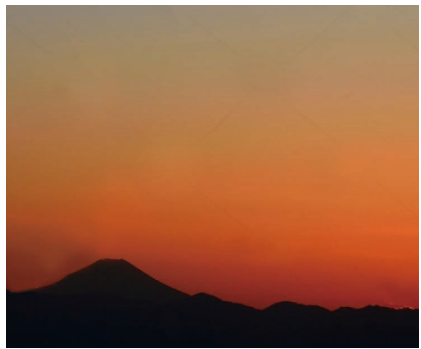
太陽が沈んだ暗黒の世界、黒の語源。漢字の黒は「火で燻^{いぶ}した色」の意味。

3) 顕（けん）－ シロ

あきらかに白くなること。ものの形がはっきり見える「著（しる）」に由来。

4) 漠（ばく）－ アヲ

それ以外の漠然とした世界。
アヲは黄色や緑などその他多くの色を含む。



- 「古事記」や「日本書紀」に登場する色は「白/黒/紅・赤・丹^{たん}（いずれも赤の1種）/青」の6色でした。



- 古墳時代末期の 538 年に中国から仏教が伝来、その前後に「陰陽五行説^{いんようごぎょうせつ}」が伝来します。陰陽五行説は紀元前 350 年頃、齊の思想家 趨衍^{すうえん}が提唱した思想で、「陰と陽」「五行（木火土金水）」の相互作用が宇宙全体に影響を及ぼしているという説によって、後の政治体制や暦学、建築、宗教に大きな影響をあたえました。陰陽五行説以降、色は宇宙や秩序と深く結びつき信仰や儀礼の中に取り込まれ、たとえば寺院の祝祭には5色の幕がかけられました。

五行	木	火	土	金	水
五色(正)	青	赤	黄	白	黒
五色(間)	緑	紅	硫黄	碧	紫



第1章 はじまりの色、日本の色（飛鳥～平安時代）

身分をまとう色

- 603年に聖徳太子によって定められた冠位十二階。この制度は五行思想に従い、広く人材を登用しつつ、その役職や身分を冠の色で規定するものでした。

たいほうりつりょう
701年の大宝律令では冠は黒に統一され、服の色で身分を表すようになりました。
位階制度は幾度となく改定されましたが、黄色と黒が設定されたのは冠位十二階の時だけでした。

高 ←

→ 低

徳		仁		礼		信		義		智	
大徳	小徳	大仁	小仁	大礼	小礼	大信	小信	大義	小義	大智	小智
紫	浅紫	青	浅青	赤	浅赤	黄	浅黄	白	灰	黒	浅黒



- 奈良時代から続いた遣隋使・遣唐使が廃止された平安時代に国風文化が始まり、日本文化の形成における転換点となりました。貴族は競って季節を感じる色を身にまといました。染色技術もこの時代に確立され優れた色布制作が奨励されました。一方で、皇室しか着ることができない「禁色」も制定され、国家が色を管理する時代でもありました。



こうろぜん
黄櫨染

現在も天皇しか着られない色



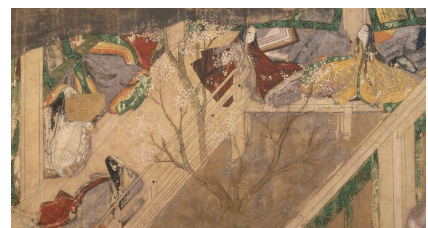
おうに
黄丹

現在も皇太子しか着られない色

ゆかり
皇室所縁の絶対禁色
(現在も禁色となっている色)

教養としての色

平安時代の貴族にとって、優れた色彩感覚を持つことは教養の一つでもありました。しかし貴族、特に女性は行動範囲が極端に限定されていたため、庭園などの限られた空間で四季の色を敏感に感じ取り、その色彩を衣服に反映させていったのです。



第1章 はじまりの色、日本の色（平安～戦国時代）

かさね

襲の色目

じゅうにひとえ

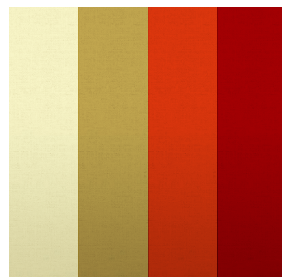
平安時代の女性貴族は、十二単の配色に季節の襲の色目を取り入れながら色を楽しみました。季節の移ろいを色で表現し、重ね合わせた配色で美意識を競ったのです。



春の色
(桜の襲)



夏の色
(菖蒲の襲)



秋の色
(紅葉の襲)



冬の色
(松の襲)

内なる豊かさを語る色へ

鎌倉時代、政権が武士の手に移ると、色の流行も大きく変わっていきます。優雅な色使いは影をひそめ、代わって好まれたのは、渋く、重く、抑えられた色。多くの武家が影響を受けた禅の思想が広がり、「茶道」「水墨画」「能」といった文化が育つ中で、色は主張するものではなく、内面を映すものへと変わっていきました。



褐色 かっしよく
紺よりも更に濃い
藍色



墨色 すみいろ



檜皮色 ひわだいろ
渋く重厚な色が武士に
愛された



織部 おりべ
織部焼の
緑釉 りょくりゅうの色



金 きん
金は武家の権力の
象徴だった



猩々緋 しょうじょうひ
伝説上の怪物の血の色と
される鮮やかな赤
金と同じく武家に好まれた



墨色は僧侶の衣の色でした。この時代の墨染（黒）は紺の下地を油煙墨^{ゆえんぼく}で何回も染めるという染め方で、手間がかかり非常に貴重な色でもありました。

第2章 庶民が咲かせる色の花（江戸時代）

戦国時代末期から江戸時代にかけて、日本の色は独自の進化を遂げます。
その背景にはいくつかの要因がありました。

① 技術の進化でより深い染色が可能に

- 憲法染めの発明 … 深い黒が実現できるようになった染め方。^{びんろうし} 檳榔子（ヤシの木的一种、^{びんろうじゅ} 檳榔樹の種子）と鉄漿水^{かねみず}を使用し、何度も染め重ねる必要がありました。
- 豆汁^ごの利用 … 染料はたんぱく質と結合する性質があり、麻などの植物素材への染まりは浅かったが、事前に素材に豆汁（たんぱく質）をまとうことで染料が深く結合し、より深い色が実現できるようになりました。
- 媒染剤^{ばいせんざい} / 助剤の発達 … 木や草の灰を水に浸した灰汁や米酢・穀物酢、梅酢を使いpHをコントロールすることで多彩な色の表現が可能になりました。



憲法 黒



檳榔子 黒

② 幕府と庶民のいたちごっこで様々な色が出現

江戸時代には度々幕府から奢侈^{しゃし}（ぜいたくの事）禁止令が出され、それは色にも及びました。染めるのに手間がかかる色、貴重な素材からしか染料が取れない色（＝高くなる）、人目をひく色は度々禁止とされました。その中でも庶民は似たような偽色^{にせいろ}を開発したり、一見地味な服でも裏地を派手にするなど、あらゆる手を使い色を楽しみました。

【偽色の例】



紅
紅花で染める



似紅
すおう
蘇芳で染める



本紫
しこん
紫根で染める



似紫
藍で染めた後
すおう
蘇芳や茜で染める



③ 文化が色にも影響を与える

多色擦りの錦絵の誕生や歌舞伎の流行で庶民が色に触れる機会が増えました。
歌舞伎役者が今でいうインフルエンサーの役割を果たしていたのです。

第2章 庶民が咲かせる色の花（江戸時代）

「粋^{いき}」は、色に宿る

江戸っ子たちが大切にした洗練された美意識や価値観を表現する言葉に「粋」があります。

- さりげなく垢ぬけていること ●人情に通じていること
- さっぱりして執着しないこと ●自然な色気があることが「粋」であることの条件でした。

この美意識は、厳しい身分制度や奢侈禁止令^{しやし}、火事の多発といった不自由な状況や規制の中で、自分らしく生きようとした庶民感情から生まれました。



江戸幕府は、身分制度の維持と質素倹約の奨励を目的として、度々奢侈禁止令を発令しました。特に町人に対しては、着用できる着物の素材（絹は原則禁止で木綿や麻に限定）、色、柄が厳しく制限されました。華美な「紅」や「紫」といった高価な染料を使った色はぜいたく品と見なされ、取り締まりの対象となりました。

黒と地味色の流行

こうした厳しい規制の中で、庶民が取り締まられない色として選んだのが、茶色系、鼠^{ねずみ}色系、そして黒といった地味な色でした。また、表向きは地味な色で倹約に従いつつも、羽織の裏地や襦袢^{じゅばん}には豪華な柄や鮮やかな色を使う「裏勝り（うらまさり）」という文化や、遠目からは無地に見える細かい染め「江戸小紋」が生まれました。

奢侈禁止令は、庶民のファッションに大きな制約を与えましたが、黒や鼠、茶といった地味な色を使い限られた枠の中で自己表現をするという、高度に洗練された「粋」の文化を開花させたのです。

第2章 庶民が咲かせる色の花（江戸時代）

しじゅうはっちゃひやくねずみ 四十八茶百鼠

奢侈禁止令を受けて江戸っ子は様々な茶色や鼠色を生み出していきます。そのたとえとして「四十八茶百鼠」という言葉も生まれました。どんな色にも「〇〇茶」「〇〇鼠」と名前をつけることで幕府の目をかいくぐろうとしたというエピソードも残されています。芝翫茶、団十郎茶、梅幸茶など、人気の歌舞伎役者の名を冠した色もありました。



えどちゃ
江戸茶



うぐいすちゃ
鶯茶



とびいろ
鷹色



あいすみちゃ
相済茶



かばちゃ
樺茶



ちゃねず
茶鼠



ふかがわねず
深川鼠



ふじねず
藤鼠



きょうねず
京鼠



あいねず
藍鼠



ねずみの
鼠志野



りきゅうねず
利休鼠

歌舞伎役者由来の茶



しかんちゃ
芝翫茶



だんじゅうろうちゃ
団十郎茶



ろこうちゃ
路考茶



ばいこうちゃ
梅幸茶



いわいちゃ
岩井茶



しこうちゃ
市紅茶

黒

黒は武士の精神性を表す色として、江戸時代初期から人気の高い色でした。商人や町人もたとえ武士のことは嫌いでも、黒の良さは感じていたようです。黒は無個性でありながら他の色と組み合わせることで、シックで洗練された「粋^{いき}」な美意識を表現できること。地味ながらも実は何回も染める工程が必要で、経済力の象徴にもなることなどから、好んで身にまわっていました。



第2章 庶民が咲かせる色の花（江戸時代）

ジャパンプルー

飛鳥・奈良時代から、日本で青染は藍を使っていました。他の染料と異なり、藍は植物素材にも比較的よく染まったのです。江戸時代に木綿栽培が本格化すると藍色は庶民に一気に浸透していきました。明治7年に来日した科学者のアトキンソンは、日本の街や暮らしに溢れる藍色に魅せられ「ジャパンプルー」と表現しました。



露草色 つゆくさいろ
藍染が行われる以前は露草の花の汁を擦り付けて染めていましたが、すぐ落ちてしまったそうです。



中縹 なかはなだ
藍は黄色と足して染められましたが、藍だけで染めた青を縹と言いました。

なんどいろ 納戸色

納戸色とは藍染が色落ちて渋くなった色。この色に別の色をかけることで、粹好みする藍色が数多く生み出されました。



なんどいろ
納戸色



こうらいなんど
高麗納戸



えどおなんど
江戸納戸



てつおなんど
鉄御納戸



さびなんど
錆納戸



おなんどちゃ
御納戸茶

「Hirosige blue」「Hokusai blue」

江戸時代、隆盛を極めた浮世絵では、青は藍や露草を使っていますが、発色や定着が悪かったとされます。1704年にベルリンの染料業者が鮮やかな青色の顔料を発見し、日本には1747年頃にオランダ経由で持ち込まれました。この顔料は「ペロ藍」と呼ばれ、鮮やかで透明感があり発色や濃淡の表現にも優れていたため、北斎や広重といった浮世絵師に重用されました。これらの作品は輸出され、西洋の多くの画家に大きな影響を与えました。



第3章 新たな時代を染める色（明治時代）

明治維新以降、日本は外国の文化や技術を積極的に取り入れていきます。
それは色・染色の世界においても同様で、大きな転換期に入りました。

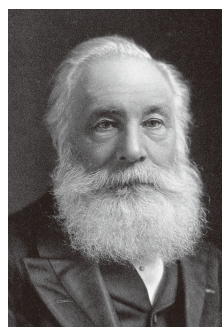
① ログウッドが染める深い黒

ログウッドはマメ科の常緑高木で、大航海時代に中央アメリカからスペインに持ち込まれました。ログウッドを使って染めることで、鳥の羽色からすのような深い黒が実現できるようになった、と言われています。日本にも明治中期に輸入されるように。ログウッドの輸入を巡っては当時のヨーロッパ各国で熾烈な争いが繰り広げられており、黒の需要が非常に高かったことがうかがえます。産地のユカタン半島の領有権はスペインにありましたが、伐採はほぼイギリス人が行っておりイギリスが実効支配。他国の密輸入などもあり、18世紀まで各国間で係争が続きました。



② 合成染料が染める鮮やかな色

1704年の「ペロ藍」の発見(正式名プルシアンブルー)に始まり、1760年頃イギリスに端を発する産業革命も相まって、染料の安価安定供給が望まれました。1856年にイギリス人のウィリアム・パーキンがマラリア治療薬の研究中に偶然、紫の染料「モーブ染料」を発見。当時西洋でも貴重だった紫色が合成できるという大発見は莫大な社会的価値と利益を生みました。これを契機に合成染料の研究が世界で加速します。日本では明治初期に輸入が始まり京都に舎密局せいみきょくを設置し研究を開始します。染色業者はその鮮やかさに注目し、友禅ゆうぜんへの実用化を推進しました。



ウィリアム・パーキン



モーブ

第3章 新たな時代を染める色（明治時代）

新しい時代の青

江戸末期に伝わった「ペロ藍」をきっかけに、植物由来ではない鮮やかな青が、徐々に日本に入りはじめました。その青をいち早く取り入れたのが新橋の芸者衆たち。そのため、その色はやがて「新橋色」と呼ばれるようになり、新しい時代を象徴する色になりました。



新橋色

殖産興業・富国強兵と黒

工業化のシンボルカラーは、鉄さびを防ぐ為に施した被膜（しさんさんかてつ四三酸化鉄）の色である黒でした。殖産興業に貢献する労働者の色として認知されていきます。



また、西洋の軍制を取り入れた当初は黒や紺の軍服を採用していました。しかし、やがて目立たず実用的なカーキ色へと変化します。西洋化の一方で、安易な模倣を戒める復古調も叫ばれ、右のような色が流行したのです。



ぐんかついろ
軍勝色



しこん
紫紺



えんじいろ
臍脂色



えびちや
海老茶

明治当時の女性の色

男性の服装が画一的でほぼ地味色だったのに対し、女性たちの装いにおいては色の変化がより自由に表れていきます。

女学生たちは知と自立の象徴として海老茶や紫の袴に身を包み、上流階級の女性たちは場に応じて色鮮やかで華やかな洋装を選んだのです。

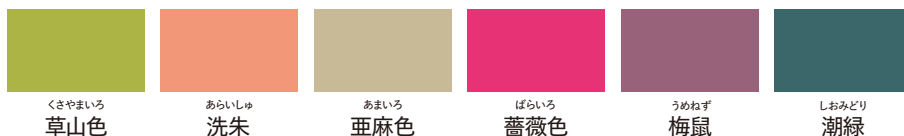
多くの女性は依然として和服で暮らしていましたが、その中で少しずつ新しい色や形を取り入れていきました。



第3章 新たな時代を染める色（大正時代～）

大正ロマンは色にも

1910年代西洋文化の一般化と日本の伝統的な美意識の融合、そして自由主義的な社会の気風が相まって大正ロマンが花開きます。自由な雰囲気の中で、古来の日本色と西洋色の融合が図られました。また呉服屋から転身した百貨店では化学染料・化学繊維の衣服も多数取り扱われました。



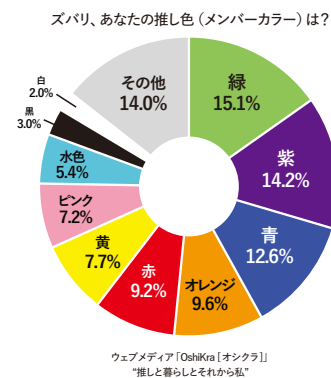
色は、時代を映す

戦時中の国防色「カーキ」、戦後の高度成長期の「パステルカラー」「原色」、1970年代、環境問題が叫ばれた時代には「アースカラー」が流行するなど、色はその時代を映し続けています。

そして、現代の「推し色」へ

「推し色(おしいろ)」とは、アイドル、アニメキャラ、VTuber など、自分が応援する「推し」を象徴するイメージカラーのこと。ファン活動（推し活）に欠かせない要素になっています。

日常生活の小物やファッションに取り入れて推しを身近に感じたり、推し活をアピールしたりする目的で楽しられています。推し色はキャラクターとつながるツールとして機能していて、それは江戸時代に歌舞伎役者を冠す色^めを愛でる気持ちと変わらないのかもしれません。



この先も続いていく日本の色の物語も、時代の文化や価値観を映し、人の心にずっと寄り添いつづけていくのではないのでしょうか。

終章 日本と西洋 色をめぐる二つの視線

明治以降、日本には西洋の様々な文化や制度などが入ってきました。それらは日本古来の感覚と混ざり合い、色彩観にも影響を与えています。そんな日本と西洋では、色との向き合い方に大きな違いがありました。

日本

- 自然を活かし、自然を取り入れ四季を表現する
- 色使いが素養や心持ちをも表す
- 色使いに開放的

西洋

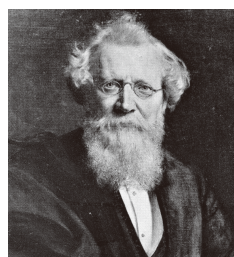
- 色も神様の創造物
- 色を身に着けること、色を作ることは神への冒瀆ぼうとく
- カラフルな色を使うのは文明的に遅れ、能力・身分的に劣る者
- 色使いに抑止的

黒 共通して受け入れられる特別な色

その中で、黒は権威・威厳を表す色、個性を隠す色として、日本でも西洋でも受け入れられてきました。また、双方において深い黒であるほど格が高いとされ、青味や赤味が強い黒は低級品と見なされました。

黒を他の色を活かす色として使ってきた日本と異なり、宗教に基づき自律的な思想が主だった西洋では、黒は慎ましやかで禁欲的な様を演出する色として身に着けられました。その慎ましさを演出したいというニーズは髪色にも。1900年前後のヨーロッパでは帝国主義的緊張が始まりかけた時代で、特に上流階級や専門職の間では自然で控えめな外見が品位を表すと認識されるようになりました。

この当時、髪を暗めに染めるニーズが存在したようで、1863年にホフマンがパラフェニレンジアミンという染料を発見。それをベースに1907年にフランスの化学者ウジェーヌ・シュエレールによって最初の合成染毛剤が開発されました。



ウィリアム・ホフマン



ウジェーヌ・シュエレール



hoyu

hair color museum

ホ-ユ-ヘアカラ-ミュージアム